

# 一期一会

この1月末、私の姉が亡くなつた。看護師だつた姉は太平洋戦争では従軍看護婦として、前線に行つたこともあつた。定年まで勤め上げたあとは、やつと青春が花開いたように大正琴やダンスや手仕事などお稽古ごとを楽しんだ。お習字は少し教えることを頼まれるほどになつた。海外旅行もあちこち参加していく。こんなのんびりしたゆとりのある時間がいつまでも続くと思つていた。

しかし4年ほど前にガングが見つかつた。骨のガ

ンだと言われた。姉はガン治療をしないと言い出でて医者と相談した。治療をしなければ余命は3年と言われたが、決意はかわらなかつた。治療しないので入院することが出来ず、デイサービスやショートステイを利用し、家族の負担を軽くして4年がすぎた頃には痛みが激しくなり、シールの痛み止めを貼つて闘つていた。やがて在宅では対応できなくなりホスピスへ入院した。ホスピスに入つて8日めに息を引き取つた。告知から4年

葬式をしたいという希望を持つていた。何回か訪問ミサをしていただき、洗礼も受けていたといふ。カトリック教会でドイツ人の司祭によつて別れのミサが執り行われた。姉の希望がかなつたことも嬉しかつたが、あたたかな雰囲気は、悲しみをも浄化していくようだつた。

「故人が私たちにしたかったのに出来なかつたこと、私たちが故人にしたかったのに出来なかつたことは全て神に委ねましょう」という司祭の言葉は遺された者をいやしてくれた。

(蝶)